

目 次

I	テーマ設定の理由	41
II	研究の仮説	41
III	研究の内容	42
1	テーマについての基本的な考え方	42
(1)	内面に根ざした道徳性の育成とは	42
(2)	道徳的实践力	42
(3)	道徳の時間	42
(4)	学習指導要領改訂のポイント	42
(5)	生活科における体験を生かすことの重要性	42
(6)	学級における指導計画の意義	43
2	学級における道徳教育の指導計画	43
3	体験的学習と関連づけた指導計画	44
4	他領域との関連を生かした指導過程上の工夫	45
IV	授業の実際	46
1	主題名	46
2	主題設定の理由	46
(1)	ねらいとする価値について	46
(2)	児童の実態	46
3	本時のねらい	46
4	指導過程	47
5	授業の反省と考察	48
6	道徳的实践につながる道徳教育の構想	49
7	児童の意識の流れ	49
V	成果と今後の課題	50
1	成果	50
2	今後の課題	50

内面に根ざした道徳性の育成と実践をめざす道徳教育

— 体験を生かした授業実践を通して —

糸満市立糸満小学校教諭 新城 栄子

I テーマ設定の理由

平成元年に告示された指導要領の改訂で、道徳の目標の前段に「生命に対する畏敬の念」と「主体性のある日本人の育成」の2点が新たに付け加えられた。『小学校指導書 道徳編』には、人間尊重の精神をさらに深化させ、生命のかけがえのなさを理解させることと、望ましい国民としての在り方をより主体的に自覚し、積極的に世界の平和に貢献し、世界の人々から信頼される日本人の育成を一層重視することが述べられている。

また、改訂の要点の一つに、「豊かな心をもち、たくましく生きる人間の育成」の重視があげられている。たくましく生きる人間とは、豊かな心を基盤として希望と勇気をもち、どのような状況にあってもくじけずに力強く生き抜くことができる自立的な人間のことである。特に、全教育活動を通じての豊かな体験による内面に根ざした道徳性の育成が求められているのは、これからの社会において人間としてよりよく生きることが強く求められているからである。児童の家庭における体験不足が指摘される中、児童自身が直接体験を通して豊かな心を育て、実際にそれらを生かした活動や行為ができるように指導することが大切だと考える。豊かな体験の場が求められているのもそのためであり、学習機会として大事にしていく必要がある。学校における道徳教育も、全教育活動における道徳教育と、それらを補充、深化、統合する道徳の時間とが、十分に関連をもって機能するように指導することが求められている。今後の道徳教育においては、各教科や他の領域との関連に配慮し、その特性を生かした指導をしていくことが重要になってくる。

ところで、今までの実践を振り返ってみると、学級における道徳の年間指導計画を立てても、道徳の時間と他の教育活動における指導との関連はあまり図られないまま指導をしてきたという反省がある。また、児童の道徳性の実態として、自己中心性が強いこと、他人の立場に立って考えることがむずかしいことがあげられ、低学年の指導内容14項目の中で、「生命を大切にすることを心をもつこと」の指導は容易なことではなかった。また、これまでに、豊かな体験をということで、体験の場を校外に求めて指導したことがある。たった1度の体験であったが、体験でしか得られない多くの成果があった。しかし、奉仕活動や慰問など校外に出て体験させるとなると、時間の確保や輸送等の問題が出てくる。毎日の生活の中で豊かな体験はないかと考えた。学年で歩調をそろえて取り組める活動で教科の指導にも差し障りなく、しかも長期的に取り組めて体験の積み重ねができそうな活動をと考えた時、生活科と関連づけての道徳の指導を試みることにした。道徳の時間と実践の場との間に児童の道徳的意識のつながりを図るようにし、児童を主体的にかかわらせるようにするならば、生活科で行う体験を生かした道徳の授業をすることができ、児童の道徳性を高めることができるであろうと考えた。

そこで、生活科の飼育・栽培活動にしぼり、その中で行われる体験活動を生かした道徳の授業実践を通して内面に根ざした道徳性の育成を図っていくことにした。さらに、学級活動の時間において実践に向けた話し合いをさせ、道徳的实践へと高まる指導を目指していきたいと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

学級における道徳教育の指導計画の中に、意図的、計画的に体験の場を位置づけ、道徳の時間を核とした他領域との関連を図った指導の工夫をしていくならば、内的な力としての道徳的实践力が育ち、より確かな道徳的实践へと結び付けることができるであろう。

Ⅲ 研究内容

1 テーマについての基本的な考え方

(1) 内面に根ざした道德性の育成とは

道德の指導において、最終的には、道德的实践のできる児童の育成が目標となる。従来の道德教育が、人間としての在り方を教えて来たのに対して、これからは、人間教育としての心の教育に重点がおかれている。そのために、今後の指導においては、「価値の主體的自覚をしっかりと行うようにさせる道德教育」に重点をおくような指導が大切になってくる。児童がそうしないではいけないという心情にならなければ、道德性を行為にまで表すことはできない。それは、また、自律的に行われるものである。そのような道德的实践を可能にするためには、行為の基盤となる内的な力としての道德的实践力を身につけることが必要になってくる。児童に、自ら道德的に望ましい行為をしないではいけないような意欲の高まりを持たせるようにすることが、内面に根ざした道德性の育成になると考える。

(2) 道德的实践力（小学校指導書道德編より）

道德的实践力とは、一人一人の児童が道德的価値を自分の内面から自覚し、将来出会うであろう様々な場面、状況において、道德的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し実践することができるような内面的資質を意味し、主に道德的心情、道德的判断力、道德的实践意欲と態度を包括する。

(3) 道德の時間

道德の時間は、全教育活動を通じて行われる道德教育を、補充・深化・統合する時間である。よって道德の時間の指導は、児童一人一人が道德的価値を自分の事として自覚し、道德的心情、道德的判断力、道德的实践意欲や態度などの道德的实践力を身につけていくことをねらいとしている。小学校における道德教育においては、道德的判断力を高める指導を行うと同時にそうしないではいけない心情の指導が大切になってくる。人は、価値の素晴らしさに気づき、感動してこそ行為に移すことができる。そのためには、一歩高められた価値観をもつこと、その価値観に照らして今までの自分をしっかり見つめ直して見る必要がある。

(4) 学習指導要領の改訂のポイント

- ① 道德の目標に新しく生命に対する畏敬の念と主体性のある日本人の育成が付け加えられた。
- ② 指導内容が4つの視点によって分類・整理され、再構成された。
- ③ 各学校ごとに重点目標を掲げ、教科や特別活動における道德教育の内容を明らかにして、年間指導計画を作成することが明示され、学級における道德の指導計画の作成も必要になってきた。
- ④ 豊かな心を持ちたくましく生きる人間の育成が求められ、そのために、体験が重視されている。
- ⑤ 他の教育活動と関連を図りながら、道德的实践力を育成する道德の時間の充実が求められている。

(5) 生活科における体験を生かすことの重要性

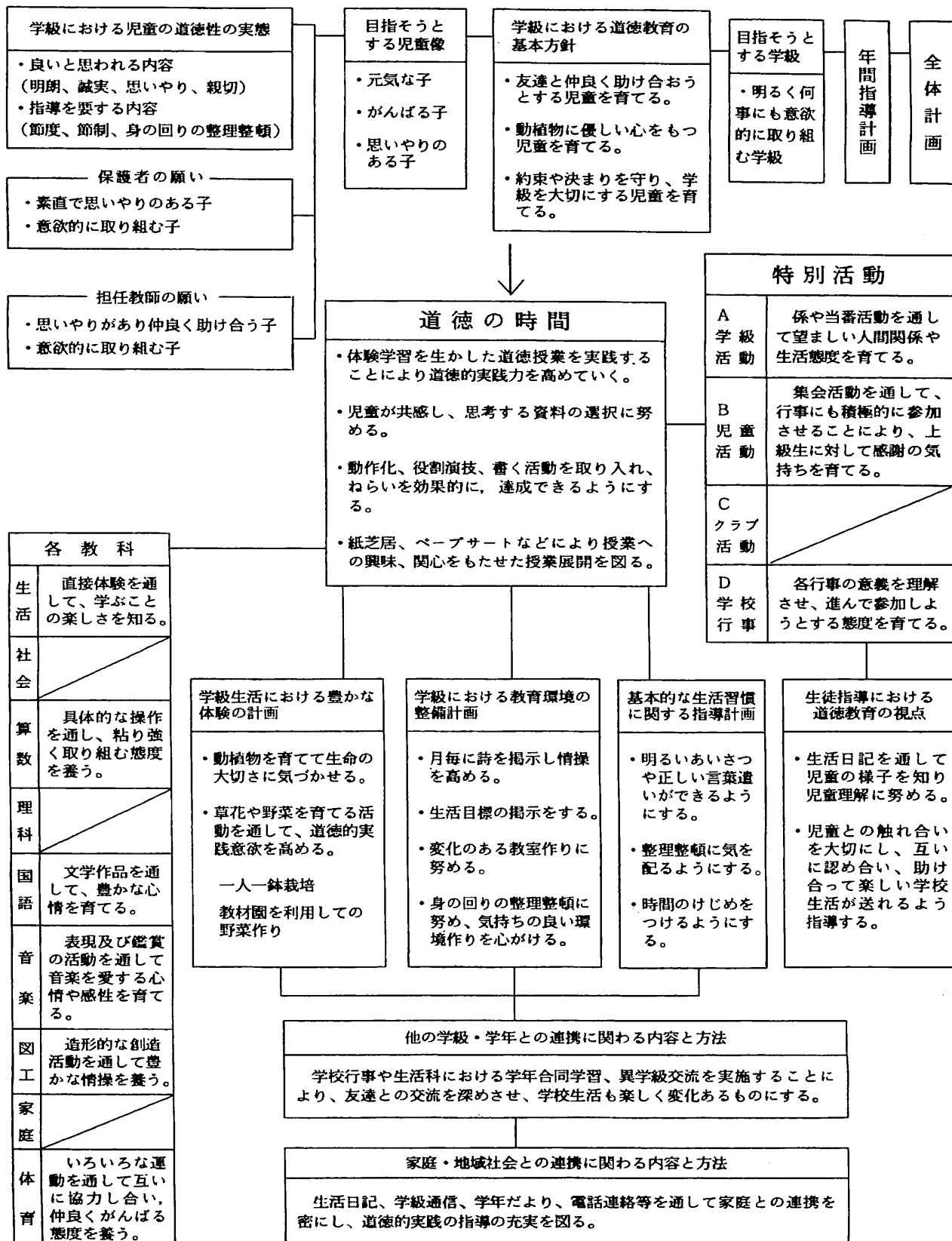
生活科の目標は、空想的には自立への基礎を養うことにある。ここでいう自立とは、生活科で行う「見る、聞く、調べる、育てる」といった具体的な活動や体験を通して自分なりの考えをもつことであり、自らの見方と行いを身につけ、自らの生活を高めていく力を目標とするものである。各教科の目標や内容には、道德性の育成に関する事項が直接、間接に含まれているが、特に生活科は、道德教育と深くかかわっている。身近な環境にかかわる活動を通して、自然愛や動植物愛護、生命の尊重、尊敬・感謝、勤勉努力などの価値を学んでいく。例えば、児童は、動植物の飼育・栽培活動を通して、その成長を喜び願う中で、感動し、自分と他者とのかわりや、自分への気づきを身につけていく。そして、動植物への愛情がやがては、まわりの者にも向けられるようになり、日常の繰り返しの指導によって、友達を認め助け合う思いやりの心にも通じていくものと考えられる。時には、児童の活動が予期したとおり展開しないこともあるが、その挫折体験を乗り越えたときの喜びは何ものにもかえがたいものがある。「為すことによって学ぶ」ことは、人に教えられること以上に、その人格に大きな影響を与えるのではないだろうか。直接、体を使って得たものは、生きた学習となって次の活動への意欲づけになる。生活科で行われる体験活動の多くが道德の指導内容を含んでいることを考えたとき、

体験活動を通して道徳性を育成することの重要性を感じる。

(6) 学級における指導計画の意義

学校における道徳教育を効果的に行い、児童の内面に根ざした道徳性を育成するには、学級における指導の充実が必要だと考え、下記のような学級における指導計画を作成した。その際、児童の道徳性の実態や保護者の願い及び期待などを知るために、アンケート調査結果に基づいて作成した。

2 学級における道徳教育の指導計画（2年）



3 体験的学習と関連づけた年間指導計画（2年）

種別		4月	5月	6月	7月	9月
特別活動	A 学級活動	・新しい学年、春の遠足 ・ゲーム集会をしよう ・健康診断の受け方 ・横断歩道の渡り方	・係を決めよう ・雨の日の遊びを考えよう ・楽しいプールの使い方 ・学級で飼ってみたい生きものについて考えよう	・係の仕事 ・きれいな教室 ・歯をみがこう ・時間内に配膳しよう	・本の借方、返し方 ・サラダパーティの計画を立てよう ・一学期を振り返って ・夏休みの過ごし方	・スポーツ大会をしよう。 ・二学期のめあて ・係を決めよう ・読書記録のとり方
	B 児童会活動	一年生をむかえる会	委員会発足	委員会活動発表	七夕集会	委員会活動発表
	C クラブ活動					
	D 学校行事	・入学式・始業式 ・発育測定	・春の遠足 ・保健的行事	・歯の衛生週間	・大掃除 ・一学期就業式	・二学期始業式 ・運動会
教科	生 活	・一年生を案内しよう ・花や野菜を育てよう ・ミニトマト、サラダナの植え付け	・雨の日の探検をしよう ・ザリガニ・グッピー ・金魚の飼育（日常活動）	・糸満の町をたんけんしよう ・いきものをかってみよう ・いきものをかってみよう（花や野菜を育てよう）	・いきものをかってみよう ・サラダパーティをしよう	・十五夜まつりにさんかしよう
道徳	重点的指導内容	自然愛・動植物愛護 礼儀、思いやり・親切	自然愛・動植物愛護 生命尊重・公德心	節度ある生活態度 生命の尊重	信頼・友情 思いやり・親切	節度ある生活態度 愛校心
	資 料 名	・二年生 ・できなかったあいさつ ・公園の花	・お、こ、さ ・わすれものたいじ ・空をとべなかったピーすけ ・わたしのしごと	・ずるい、ずるい ・赤いふね ・おやこのぞう ・だってお兄ちゃんだもん	・七つのほし ・さかあがりできたよ	・あたらしいがっきゅう ・おばあちゃんのお手玉 ・ノートのひこうき
学級、学校環境		・学年、学級のめあて ・一学期のめあて ・係のめあて	・えんそくのめあて	・写生会の絵 ・糸満の町の絵地図	・教室内外の整備	・二学期のめあて ・夏休みの作品展示
その他の	生徒指導	・登下校のきまりを守りましょう ・あいさつ運動（4月～3月）	・身なりをきちんとしましょう	・時間のけじめをつけましょう	・学校をきれいにしましょう	・時間のけじめをつけましょう
	学校裁量、学年学級の時間部活動	・グループ活動 ・教材園や花壇の手入れ	・基礎学力テスト ・母の日のプレゼント作り	・学年集会 ・父の日のプレゼント作り	・七夕飾り作り、七夕集会 ・野菜作り新聞	・おじいさん、おばあさんへの手紙
関連・連携	家庭との連携	・家庭訪問、学級だより	・学級PTA、授業参観	日曜参観	・学級PTA	・夏休み作品展
	地域社会との連携			糸満ハーレー	地域子供会	糸満大綱引き
	他学年との連携	・一年生をむかえる会 ・一年生をあんないしよう				

（10月～3月までは省略）

4. 他地域との関連を生かした指導過程上の工夫

体験を生かした授業を構想するとき、他領域との関連を生かした指導過程が考えられる。事前・事後の指導とあわせて考えてみた。道徳の時間に、児童一人一人が体験を通して気付いたことや分かったことなどを語ることによって、自分自身の価値観の道徳的意識を知る。そこで、自他との違いに気づき、学び合う中でよりよい生き方を求めようとするのである。検証授業では、現在育てているハツカダイコンを提示して道徳的意識を思い起こすようにした。

表 4 - 1 体験を生かした道徳の時間の指導過程

段 階			教 師 の 働 き か け	児 童 の 学 習 内 容
他 領 域	事 前	体 験	1 学校における道徳教育の指導計画の中に、意図的・計画的に体験の場を位置付け、児童が主体的にかかわれるような手立てを講じておく。(一人一鉢栽培、係の輪番制、継続性を持たせる。) (アンケートの実施)	・飼育、栽培日記、作文を書く。 ・学校行事などの体験を作文にまとめる。 ・生活新聞を作る。
道 徳 の 時 間	方 向 づ け	導 入 5 分	2 自分の体験を振り返らせ、これから学習するよう なできごととはなかったか。その時、児童は、どの ように行動したか発表させる。	・授業で追求する内容について課題意識を 持つ。
	道 徳 の 追 求 ・ 把 握 ・ 主 体 的 自 覚	つ か む 20 分 25 分	3 資料を提示する。 (1) 主人公はどのようなことをしたか。 (2) 主人公がこのようなことをしたのはなぜか。 (3) 主人公は、そのときどのような気持ちだったか。 (4) 主人公は、どうすればよかったか。	・資料の主人公の考え方や行為を自分と照 らし合わせ、自分なりの考えをもつ。 ・自分の考えを友達の考えと比べ課題を追 求する。 ・主人公の生き方や級友の多様な生き方を 知り、より高い価値を認識する。
		高 め る 10 分	4 児童に主人公のような経験をしたことがあるか。ま た、見たり聞いたりしたことがあるか等の体験や疑 似体験を語らせ、自分の考えを深めるようにさせる。	・資料を離れて自分を振り返らせ、「でき た自分」「不十分だった自分」「できな かった自分」を見つめる。 ・児童のよさが現れている作文や絵、体験 前後のアンケートの結果、VTRの視聴、 具体物などを通して価値の主体的自覚を 図る。
	終 末	生 か す 5 分	5 実践できる見通しを持って、価値を生かせるよう 体験の場の生かし方、在り方を自覚させる。 (教師の体験談、児童の作文、格言の紹介、ことわ ぎ、etc)	・各自が持っている道徳的よさに気づき、 実践しようとする自覚を高める。
他 領 域	事 後	実 践	6 道徳の授業後、主体的なかわり方について話し 合い、実践への具体的な方法を明らかにする。	・道徳の授業で深まったであろう価値意識 を日常の活動へつなぐ。

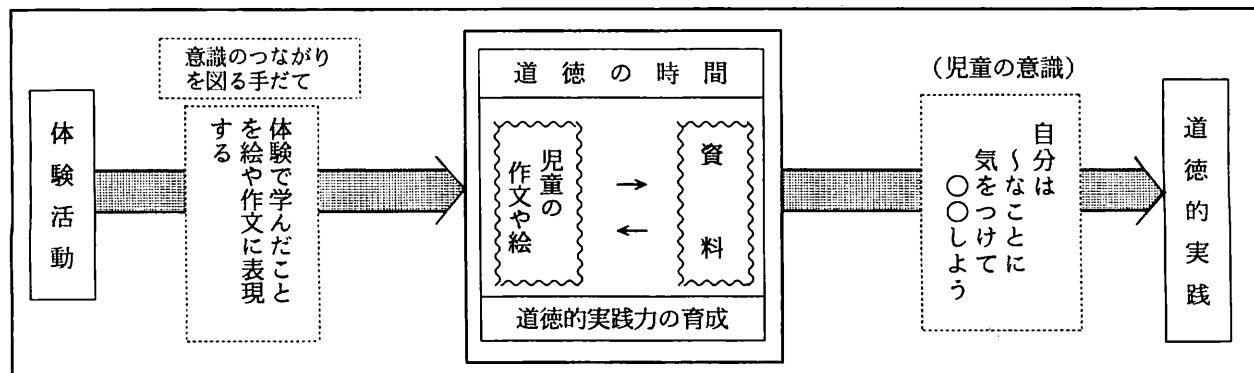


図 1 体験から実践までの児童の意識の流れ

(出所) 香川県小学校道徳教育研究会著 『子供が自ら学ぶ道徳教育 体験を生かした道徳授業の展開』1993年 158ページ

IV 授業の実際

1 主題名 たった一つの命 <3-(2)生命尊重>

資料名 「空をとべなかったピーすけ」

2 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

この主題でねらう価値内容は、動物の死を通して生命の大切さに気づかせ、命を大切にしようとする心情を育てることである。幼児期の自己中心性がまだかなり残っていて、相手の立場を認めたり、理解したりすることがむづかしいこの時期において、生命を大切にする心をもつことは容易なことではない。しかし、児童が身近にいる動植物に優しく接し、その成長や変化、死などを通してすべてのものに生命があることに気づき、他の人も自分と同じように命をもっていることを理解するならば、命を大切にしようとする心を育てることは可能だと考える。特に、いじめに見られるような相手の立場や気持ちを思いやる心に欠け、友人を死に追い詰めてしまうような生命軽視の風潮も見られる現代社会において、生命尊重の精神を指導していくことは大切だと考える。児童の発達段階に即して指導していきたい。また、この指導を通して道徳性の根底をなす思いやりの心や優しさやいたわりの心も育てていきたい。

(2) 児童の実態

この期の児童は、動植物に対して興味や関心が非常に強い。反面、遊びに夢中になると世話をするのをすっかり忘れて死なせてしまったり、自分の気のむいたときだけしか世話をしないということが多い。児童は生きものの死についてどう思っているのか、アンケートをとってみることにした。

① あなたのかっていた生きものが、しんだりけがをしたりしたことがありますか。

はい 20人 (67%) いいえ 10人 (23%)

② そのとき、どんな気持ちでしたか。

- ・いやな気持ち (9人)
- ・かわいそう (8人)
- ・とってもなきそうになった (2人)
- ・しんでほしくないとおもった (2人)
- ・かなしい (2人)
- ・いたそう (1人)

生きものがかりの感想

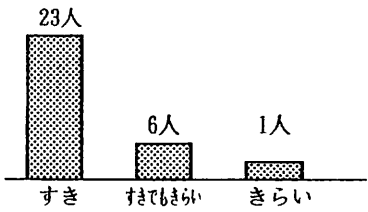
- ・かなしかった。
- ・せっかくいっしょうけんめい生きてきたのに。
- ・いやだった。しんでほしくなかった。
- ・なんでしんだんだ、さっきまで生きていたのに。
- ・いやな気持ちだった。

アンケートの結果から、多くの子が死の悲しみを経験していることがわかる。「死んでほしくなかった」や「なんでしんだんだ……。」という感想から、児童は、生きものに対する気持ちというよりも人間に対するのと同じような気持ちをもっていることがわかる。直接かかわりの多かった子ほどその感想は生々しい。そこで、低学年の特性として、動植物や資料の主人公と同化しやすいという面を指導に生かし、展開の後段でしっかり世話のできなかった自分やいっしょうけんめい世話をした自分のよさに気づかせ、学級で飼っている生きものや現在育てているハツカダイコンもみな生きものであること、生きているものすべての命は大切にしなければならないことに気づかせるようにしていきたい。また、11月に行った道徳性診断検査の結果によると、本時のねらいとかかわりのある「自然愛・動植物愛」と「生命尊重」については、数値的に見て全国より低い。それぞれの基準の平均値を比べてみても指導内容の14項目の中では低い方に入ることがわかった。本学級において、重点的指導を要する価値項目といえる。日常生活でみられる友達同士の靴かくしや、やられたら必ずやり返すという児童の実態をみても、自他の生命を大切にし、他を思いやる指導の必要性を感じる。

3. 本時のねらい

生きものにやさしく接し、命を大切にしようとする心情を育てる。

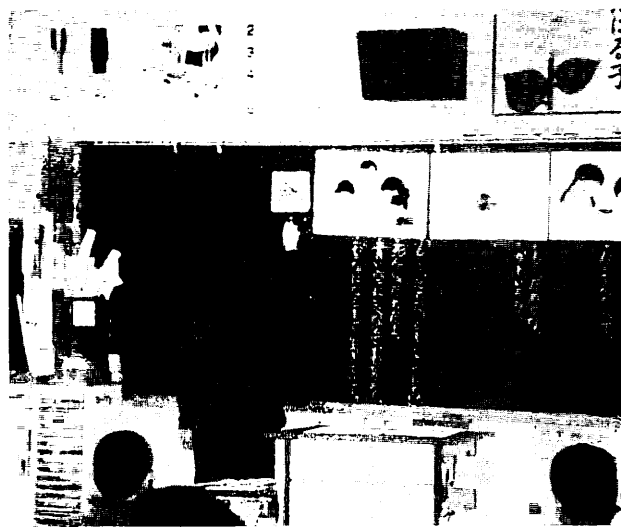
4 指導過程

過程	主 な 学 習 活 動	教 師 の 働 き かけ
気 づ く	1. 事前に調べたアンケートの結果を知る。 アンケート① あなたは、生きものが好きですか。  アンケート② すきなりゆう・かわいい ・せわをするのが楽しい ・わたしたちのように生きて そだつから	・事前にとっておいた児童のアンケートの結果を示して、学習への方向づけをする。 (グラフ化して視覚的に示す。) ・ねらいとする価値にかかわりのある児童の考えを押さえておく。
と ら え る	2. 資料「空をとべなかったピーすけ」の紙芝居を視聴する。 (1) 紙芝居をみての感想を発表する。 (2) 話のあらすじをつかむ。 ・子すずめのピーすけを介抱するふたりの気持ちを考える。 ・急に元気がなくなったときの家族の気持ちを考える。 ・「もうだめだな。かわいそうにな。」とおとうさんがいったときのみんなの気持ちについて考える。	・本時の学習への期待や意欲をもたせるために、ペープサートで資料の中に入りこませ、感動的にききとらせる。 (効果音を入れた録音テープを流しながら、紙芝居をする。) ・動物の死に感傷的になって涙ぐむ児童がいる時は配慮する。 ・さし絵を活用しながら、あらすじを手際よく把握させる。 ・ねらいとする道徳的価値を含む児童の思いや考えを出させるようにする。
み つ め る	3. これまで生きものをどのように世話してきたか、振り返る。 ・生きものが死んでしまって空になった飼育箱をみて死ぬということは、どうなることを考える。 ・「命」とは何かを考える。 ・現在育てているハツカダイコンを見比べる。 4. これまで自分は、生きものや植物のことを心から考えて世話してきたかを考えてワークシートに書く。 5. 友達の作文を聞く。	・動植物を育てていて死なせた経験を想起させ、本時との接点を図る。 ・「生きものの死」を通して命の大切さに気付かせる。 ・成長のいいものと悪いものを比べさせて、命あるものとしてのハツカダイコンに気付かせ、自分のかかわりかたを反省させる。 ・友達の作文を聞き、自分の考えを深めたり広げたりする。
た か め る	6. 教師の話を書く。	・寿命の短い蟬の話や本時で扱ったすずめの寿命を取り上げて、限りある命をせいいっぱい生きている生きものを大切にしようとする意欲を高める。

5 授業の反省と考察

本時のねらいにせまるために、指導の工夫として、以前に飼っていた金魚やザリガニの死を想起させた。かわいがっていた生きものの死をただの失敗に終わらせず、本時で道徳的实践力を高め、現在行われているハツカダイコンの栽培や生きものの飼育につなげることができればと考えた。単に道徳の時間を、1時間の中だけの指導で終わらせたくないと思い、その前の活動とつなぐものとして体験を振り返らせ、これからの活動へ発展できるように、自分をみつめる段階で飼育箱やハツカダイコンなどの具体物を提示した。児童に具体物を通して自他の違いに気づかせ、学習する内容を自分の問題として捉えて、価値の主眼的自覚を促すようにしたのである。展開の後段で書いた児童の作文には、資料の内容に共感して、生命の大切さに気づいた児童が多く、ねらいとする価値に気づかせた後で体験を振り返らせるということは、児童に自分自身の問題として考えさせ、今までの自分をしっかり見つめ直すことができたのではないかと考える。児童の心と体験がしっかり結ばれるようにすることは、内面に根ざした道徳性の育成を目指す上で重要だということが確認できた。

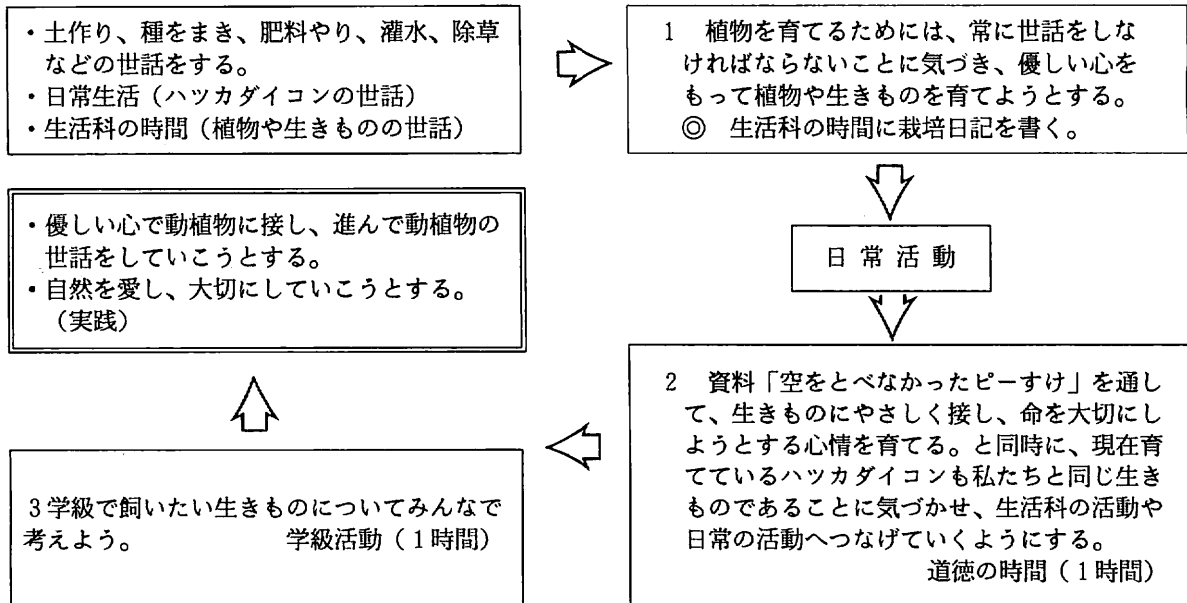
(児童に飼育箱を示して体験を振り返らせる) (キーワードとなる文字カードを提示して興味を引く。)



(授業後の児童の感想文)

①かわいがっていきなさい。 ②だいじにやぶでていく。 ③自分の子みたいにいせわをしていきなさい。 しせん(しくがこ) ①のいにち水をやる。 ②かれないうようにする。	いきのうは人間とおなじ心をもていふからちゃんとそをいいます。どうぶつもいきものも、生きていふんだからちゃんとそをいふとだいいいにそをいふでいふたいとすもいしました。	したせないうようにいきものきおとなになるまでいきづけるようにしてあげたい。	いままでの「自分」を思い出して考えてみましょう。あなたは、今までかったことのあるきんぎょやザリガニなどの生きものを心からかわいがっていましたか。 ※じぶんにちかいものに、○をつけてみましょう。 ほく(わたし)は、いきものを () かわいがって、よくせわした。 (○) 少しはかわいがった。 () あまりかわいがらなかった。 ◎よくかわいがったことのある人は、どのようにせわしてきたのか書いてみましょう。また、かわいがらなかった人は、なぜできなかったのか書いてみましょう。そして、これからいのあるいきものを、どのようにせわしていきたいのか書いてみましょう。 爺(きんぎょ)じよつこ(ザリガニ)
--	---	--	--

6 道徳的实践につながる道徳教育の構想



7 児童の意識の流れ

児童が体験に主体的にかかわれるような手だてを講じて、体験⇒授業実践⇒学級活動⇒実践へとつなぎ、児童の意識の流れを捉えてみることにした。栽培日記より、児童は、植物の成長の変化に、「すごいな」とか「くっついてる」とか気づいていることがわかる。この気づきや願いを大切にしながら、道徳の時間に体験の見直しをさせることにより、自分自身のよさや不十分さに気づくのではないだろうか。その後で、実践に向けて話し合いをさせ、野菜の栽培と平行しながら生きものの飼育に取り組ませることにした。グッピーが来たときの「きてくれてありがとう」の作文から、児童に実践させるとき、必然性を持たせるように取り組ませると意欲的に取り組むことが確認できた。

（ハツカダイコンを育てていく中で見られる児童の気づきや願い）

（授業後に書かせた児童の作文）

はつかだいこんくん
はやく大きく
なつてね。
かんぱつて大きく
なつてね。

はつかだいこんさん
とっても大きくなつた
ね。
ねっ、こが赤くなつたね。
すごいな。

きょうわたしは、は
つかだいこんをみてく
っついていたからはな
しました。

「日本に生えるはつかだいこんは、
心をもち、だから毎日水をあげ
るでも水の量をきをつけてあげ
る。それにあげすぎたらかたまり
のちやんがなくなってしまう。か
ら水の量をきをつけてあげて
しなでしなでかわくそうだし
せ、かくおとなまでいきたし
なのに、それができたらうかめい
つたから、二日たいてい、さく
なうんします。

（グッピーがやってきた日の児童の作文）

（グッピーをもって来る前日の作文）

いよいよきみが来た
ね。
えさをあげるから、
長生きしてね。

グッピー、きてくれ
てありがとう。

グッピー、いよいよ
来るね。
楽しくきみをまってる
よ。
そして、きみにえさ
をあげるよ。
きみをたいにそだ
ててやるよ。

わくわくします。だ
って、あたらしいとも
だちがくるから。それ
に、なかがまぶえるか
ううれしいです。

IV 研究の成果と今後の課題

1 成 果

- (1) 学級における道德教育の指導計画の中に、意図的・計画的な体験の場を位置づけ、体験を組み入れた道德の時間の指導を工夫することによって道德的実践力を道德的实践に結び付ける指導ができた。以前にも増して意欲的に取り組む児童のようすから、他領域との関連を図った道德教育の指導の重要性が確認できた。
- (2) 学級における道德教育の指導計画を立てる手立てとして、児童の道德性診断検査を実施し児童の道德性の実態が把握できたこと、アンケートによって保護者の道德教育に対する期待や関心及び願い等を知ることができたのは、大きな収穫だった。
- (3) 体験を生かした道德授業の基本型を作って授業をすることができた。
- (4) 年間指導計画の中に重点的指導内容を明確しておけば、他の領域と関連づけた指導がしやすいことが分かった。

2 今後の課題

- (1) 授業の成否にかかわるといわれる資料の選定や話し合いのさせ方についての研究を深めていきたい。
- (2) 学校行事や自主活動など教科以外に行われる他の体験活動にも目を向けて、児童の道德的実践力を育てるようにし、事前・事後指導の工夫も考えていきたい。
- (3) 家庭との連携を密にした道德教育の在り方や、個に応じた援助の在り方について実践研究をすすめていきたい。

〈主な参考文献〉

尾田幸雄編	『小学校 新しい道德指導の展開』	教育出版	1989年
押谷由夫監修	香川県小学校道德教育研究会著		
	『子どもが自ら学ぶ道德教育体験を生かした道德授業の展開』	東洋館出版	1993年
新見謙太・田中力偏	『子どものよさが生きる生活科』	教育出版	1994年
押谷由夫・立石喜男編著	『10小学校道德内容項目の研究と実践 自然と動植物を愛する』	明治図書	1991年
	『11小学校道德内容項目の研究と実践 自他の生命を尊ぶ』	明治図書	1991年
新宮弘識編著	『道德 生き生きとした授業を創る』	国土社	1992年
永田繁雄・荻原隆著	『1年生の授業 道德 子供が活躍する授業づくり』	東洋館出版社	1992年
福岡大学教育学部付属	『感動体験を中核とした		
福岡小学校著	「生活科」の授業づくり』	明治図書	1991年
熱海則夫・石川脩男	『新しい道德教育の展開』	ぎょうせい	1992年
瀬戸 真編			